

ラクダの話

大庭直樹

ラクダを17頭持っている族長がいた。その男には3人の息子がいて、自分の死に際して、17頭のラクダの2分の1を長男に、3分の1を次男に、9分の1を三男に分け与えたいと思った。しかし、分配の仕方が解らず、賢者(catalyst)に相談することにした。賢者は族長に言った、「遺産相続のとき、私のラクダ1頭を貸してあげよう。そうしたらラクダの数が仮に18頭になる」そこで長男は18頭の $1/2$ (9頭)、次男は18頭の $1/3$ (6頭)、三男は18頭の $1/9$ (2頭)受け取ることになる。財産のラクダは息子たちにそれぞれ9頭、6頭、2頭に分配され、賢者は余った、自分の1頭を引き取った。財産はすべて、父親の遺言通りに、息子たちに賦与された。

The sheik owns 17 camels and has 3 sons. Upon his death, he wishes to distribute the camels to them in this ratio: $1/2$; $1/3$ and $1/9$. When he can't figure out how to do this, he calls in the wise man, the catalyst. The wise man tells the sheik he'll loan him a camel during the bequest so the estate will temporarily have 18 camels. The first son gets $1/2$ of 18, or 9 camels; the second son gets $1/3$ of 18, or 6 camels; the third son gets $1/9$ of 18 or 2 camels. The estate has distributed $9 + 6 + 2$ or 17 camels. The wise man takes back his camel; the sons are endowed and the estate is zeroed. (Koerner's Camel Story)

この寓話は、教育者の役割について語っている、と理解することができる。つまり、教育者が本来的に目指すところが、学習者にとっての触媒(catalyst)となることにある、ということ。小笠原先生と河内先生は、長い駒澤大学での研究・教育生活において、何時も予備の“ラクダ”を用意され、学生に貸し与えて来られた。お二人とも次の旅においても、駒澤大学で用いられた“ラクダ”を賢明に使われることでしょう。